用も検討している．しかし，その取り扱いに一定の見解はなく，症例の蓄積が必要である．

2　胃憩室による偽副腎腫瘍の1例

宗田　　聡・石澤　正博・山田　貴穂
新潟市民病院内分泌代謝科

症例は68歳，男性．胸部CT撮影した際に偶発的に左副腎腫瘍（16.7mm）を認めた．診断目的に当科を受診した．

【身体所見】BMI 24.5，血圧 110/60 mmHg．浮腫，満月様顔貌などは認めない．

【経過】cortisol 11.5μg/dl，ACTH 27.6pg/ml，メタネフリン 0.08mg/day，ノルメタネフリン 0.24mg/day，PAC 52.8 pg/ml，PRA 0.9 ng/ml/hr，デキサメタゾン 1mg 抑制試験では cortisol 0.79 μg/dl．以上の結果から非機能性副腎腫瘍と診断した．1年後再検査したCT画像で左副腎と思われた腫瘍の内部に air density が認められ，胃との連続性が疑われた．胃X線検査を施行したところ，胃穹隆部小弯後壁に憩室を認め，胃憩室による偽副腎腫瘍と診断した．

【考案】胃憩室の発生頻度は 0.03 ～ 0.3 %と低く，副腎腫瘍との鑑別が問題となることは稀である．不必要な手術のリスクを避けるべく，左副腎腫瘍の診断の際には胃憩室に注意を払うべきである．

3　当院における腹腔鏡下副腎摘除術：20年間の統計

信下　智広・鳥羽　智貴・笠原　　隆
新井　　啓・西山　　勉・高橋　公太
新潟大学医歯学総合病院
腎泌尿器科病態学部門

【目的】当院は1992年1月に世界で初めて腹腔鏡下副腎摘除術を施行した施設である．この20年間における，世界での初症例から現在までの症例を報告する．

【対象と方法】1992年1月から2010年7月の間に腹腔鏡下副腎摘除術を施行した209例を対象とした．男女比は87：123．年齢は平均51.0歳（12 ～ 81歳）．右102例，左86例，両側21例（一期的手術1例，二期的手術5例，片側のみの手術9例）であった．原発性アルドステロン症82例，Cushing症候群43例，褐色細胞腫31例（悪性褐色細胞腫3例），副腎癌3例，ACTH産生腫瘍6例，ACTH非依存性大結節副腎皮質過形成5例，テストステロン産生腫瘍1例，非機能腫瘍39例であった．

【結果】手術時間の平均192.6分（64 ～ 572分）．出血量の中央値は50 ml（小量～ 3,740ml）．経腹膜到達法24例，後腹膜到達法186例．合併症として500 ml以上の出血13例，肝損傷1例，膵損傷1例，脾損傷1例，小腸損傷1例，術後洞停止1例，皮下気腫1例を認めた．

【結語】当院での20年間で行った209例の腹腔鏡下副腎摘除術の手術統計を考察した．

4　女性化乳房の精査でみつかったアンドロゲン不応症の1例

鈴木　　亮・本間　丈成*・佐藤　英利
小川　洋平・長崎　啓祐・菊池　　透
新潟大学医歯学総合病院小児科
下越病院小児科*

女性化乳房は良性の乳腺組織の増生からなり，思春期男児の約6割で見られる生理的な現象であるが，時に基礎疾患を有していることがある．今回我々は，アンドロゲン不応が示唆された思春期女性化乳房の1例を経験した．

症状の遷延や家族歴を有する女性化乳房では，基礎疾患の有無について精査が必要である．

5　43年間放置されていた特発性中枢性尿崩症の1例

鈴木　克典
済生会新潟第二病院 代謝・内分泌内科

症例は61歳，女性．主訴は口渇，多飲，多尿．

【現病歴】生来健康．1969年（20歳時），口渇，多飲，多尿を主訴に岐阜県某総合病院を受診．